

深山リンドウ

いっ

—中嶋雄雄

『市民タイムス』五月一日付のこの欄で

『深山リンドウ』

考」と題し、松本深志
高校山岳部に伝わるこ
の山の歌について私が
様々に推理した直後
に、この歌の作詞者、
作曲者が判明した。

深志山岳部OBの諸
氏もいろいろに語りあ
い、こたわり続け、『山
の歌集』(山と溪谷社
刊)の編著者・土橋芳
子氏にも御尽力いただ
いて採譜した後の結末
にしては、やや拍子抜
けの感もあるけれど、
西条八十作詞、古関裕
而作曲の「美しきアル
プスの乙女」がその原
曲であった。この曲は、

終戦直後に二世を風靡
した「リンゴの歌」の並
木路子のレコードとし
て、昭和二十五年六月
にコロムビアから世に
出たものである(コロ
ムビア・レコード番号
A八二六B)。つまり、
戦後日本の歌謡曲の一
つだったのである。
事柄が判明した経緯
は、こうである。

『山の歌集』に収録
された深山リンドウの
解説には、「この歌
の原作者、原曲の楽譜、
また貴重な情報を知り
たいと、深志高校の方
達の希望です」とあっ
たのだが、世間は広い
というべきが狭いとい
うべきか、『山の歌
集』発売直後に福岡市
在住の登山好きの会社
員・村上寿浩氏が、原
曲の録音テープを編著
者に届けて来られたの
である。土橋女史は、

そのテープを私にも送
って下さったので、早
速、聴いてみると、『深
山リンドウ』ほどの哀
調はなく、いかにも歌
謡曲風であるけれど、
「美しきアルプスの乙
女」が原曲であること
は歴然とした。『深山
リンドウ』について、
それが「アルプスの乙
女」として歌われてい
たこと、メ
ロディーは
いかにも大
正ロマン風
の日本調ではあるが、
譜面上の曲の形式は洋
楽風でもある」と書い
たばかりの私の推理が
その的をはずれてはい
なかったのではありません
か。謎はあま
りにも早く解けてしま
った。

よく知られているよ
うに、古関氏や西条氏
は、戦前、「露営の
歌」(古関作曲)、「予
科棟の歌」(同)や「旅
の夜風」(西条作詞)、「
支那の夜」(同)な
どで軍国日本の歌謡界
をリードしたけれど、
戦後は「鐘の鳴る丘」
(古関)、「長崎の鐘」
(同)、「君の名は」
(同)、「東京行進曲」
(西条)、「青い山脈」
(同)、「トンコ節」

の町エレジー」が街に
流れ出ており、翌二十
六年には民放も発足し
て美空ひばりや江利チ
エミ、雪村いづみが大
活躍する境目であっ
たことも想い起され
る。こうして「美しき
アルプスの乙女」は消
えてゆき、ごく少数の
人びとに歌い継がれ、
やがて「深山リンドウ」
となったの
であった。

先の村上
氏のテープ
は、一年程前にNHK
の歌謡番組にこの曲を
リクエストした人がい
て、それをたまたま録
音したものだという。
「美しきアルプスの乙
女」は、福岡市の古関
裕而記念館でCDに収
録されていてヘッドホ
ーンで聴くこともでき
ることがわかった。

は、山と溪谷社の編集
担当者とともに、早速、
西条、古関両氏の御遺
族に連絡し、再版以降
は原作者名を明記する
こととともに著作権料
の問題も解決され、今
までおりのメロディ
で深志の皆様が胸を
張って歌える「深山リ
ンドウ」になったこと
をうれしく想います」
と語っておられる。
私は、今回のことで
西条八十氏の御子息、
西条八束氏ともお話し
したが、名古屋大学名誉
教授で湖沼学の権威で
もあられる八束氏は、
旧制松本高校の御出身
で、永年、木崎湖畔に
山荘をもたれていると
のことであった。こう
して信州にゆかりの深
い同氏も、深志山岳部
の諸君が「深山リンド
ウ」としてこの歌を愛
唱してきたことを喜ん
で下さった。
先週末にはたまたま
外語山岳会の合宿が谷
川岳マチガ沢であった
ので、私も参加し、以
上の経緯を話すと、深
志高山岳部に伝えたら
しいという外語山岳会
のOB連は、みなこの
歌を想い起すことがで
き、雨中のテントの下
で火を囲みながら、三
十数年ぶりに合唱した
のであった。
なお、「深山リンド
ウ」の歌詞の一部分は
原曲と異なっている
が、原曲の方は三番ま
であって、次のとおり
である。
赤いトサカの鷹も
／やさしい友のカモ
シカも／みんな待っ
てるあの谷間を／月
は今宵も照らすやら
／恋しきアルプス乙女
の夢よ
(東京外語大教授)